

## "基本的"なのに"知的レベル"は高い！？ —「大嫌い」から解放する大学英語の創り方—

山田昇司（朝日大学）

### 目次

1. はじめに — 「教室の事実」を語ること
2. 「基本的」なのになぜ「レベルは高い」と感じるのか
  - 2.1. 私にとっての「発見」と「感動」の題材群
    - 2.1.1. 背筋が寒くなる計算式の話 — 天秤に掛けられる人命と設計コスト
    - 2.1.2. 勇気と希望を与える少女の話 — "Stop the Pop!" のポスターは消えたが…
    - 2.1.3. 現実を読み解くヒントを与える英文
      - 2.1.3.1. 沖縄からグアム、ハワイへ — 米軍基地「移設」に騙されない
      - 2.1.3.2. ベラルーシの 25 年後 — 「直ちに影響はない」の本当の意味
  - 2.2. 題材選択の視点 — 「人間教育」としての英語教育を！
3. 「難しい」英文を「易しく」「楽しく」読むために
  - 3.1. 英文を読みたくさせるもの — 映像と音楽、そして日本語資料
    - 3.1.1. 私が英語完全版『レ・ミゼラブル』を読みたくするまで
    - 3.1.2. 広がる好奇心、新たな発見 — やめられない、とまらない「英語学習」
  - 3.2. 私の学生時代の「苦行道」と「易行道」 — 決め手は「楽しさ」
  - 3.3. 語義は本当に全て与えていいのか？ — 私のドイツ語、学生の英語
  - 3.4. 映像のある英文を選ぶ — 事実と感動を伝える映像のパワー
  - 3.5. 映像を見せることの難しさ — 「字幕」についていけない学生
4. フレーズ単位で読みすすむリーディングの授業
  - 4.1.1. "My Neighbor Totoro" を読む授業（前期 1～7 時間目）
    - 4.1.1. 意欲を引き出す復習テストの試み
    - 4.1.2. 「字幕」から学ぶ日本語再発見
  - 4.2. "Chew On This" を読む授業（前期 8～15 時間目：現在進行中）
    - 4.2.1. スピーディに進行する一斉授業
    - 4.2.2. 内容を深める「問い」を投げかける
5. 英音法の根幹を学ぶ「リズムよみ」
  - 5.1. 「リズムよみ」はいかに生まれ、どのように発展してきたか
  - 5.2. 「英語で英語の授業」と相性がいい！？「リズムよみ」
  - 5.3. 教室に吹き込む新風 — 「明るくて、楽しくて、かたくなるしくない」
  - 5.4. 「リズムよみ」が要求するグループ学習
  - 5.5. 「ムーアが見えた！」 — 2011 年度の私の授業
6. おわりに — 書くことは考えること

<参考文献>

## 1. はじめに — 「教室の事実」を語ること

私は寺島隆吉氏が主催する研究会(JAASET: 英語教育応用記号論研究会)で氏の理論と実践を学んできました。この発表ではその追試を行っている私の授業の様子を紹介しながら大学英语における「題材選択と教材化」「リズムよみ」「評価のしくみ」の三つの問題について論じます。

ただ「追試」とは言っても自然科学の実験の追試とは異なりますので「教える人の力量」「教えられる側の学力」「そのときの社会情勢」などの様々な〈現場変数〉によって、追実践は千差万別の様相を呈してきます。そこでその姿がよく伝わるように「教室の事実」を丹念に書き起こしながら寺島氏の理論を検証していきたいと思います。

この「教室の事実」という言葉は実践研究論文のありかたについて論じた三浦(1991)に拠ります。氏はこの中で寺島美(1987)に言及して「ここには生徒の様子と、教師の取った対応、それに対する生徒の反応、教師の反省の連鎖が描かれ、寺島氏が指導法を確立していった道筋がはっきりと示されている」と述べ、このような「教室の事実」を書き込むことが「研究栄えて授業減ぶ」という結末に陥らない要諦であると述べています。

なお寺島氏の理論体系は「私の教育原理」(『英語教育原論』2007: 57-61, 明石書店)や「日本の英語教育が目指すべき『英語力』とは何か」(中部地区英語教育学会 2009 静岡大会「シンポジウム」発表要旨 <http://www42.tok2.com/home/ieas/symposiumshizuoka090702.pdf>)に示されています。また先月の毎日新聞(2013/5/31)特集「英語の授業—どうあるべきか」には氏のインタビューが掲載されていてその考え方が簡潔にまとめられています。〈資 1〉

## 2. 「基本的」なのになぜ「レベルは高い」と感じるのか

まず最初に発表タイトルにどうして〈「基本的」なのに「知的レベル」が高い!?〉という言葉を用いたかについて説明します。これは昨年度わたしが教えたある1年男子学生の作文に由来します。その学生は入学時に書いた自分史「英語と私」いう作文の中で次のように書いていました。

「英語が大嫌いと思っていると頭の中に英語が入らずに見たり聞いたりするだけでいらいらするほどでした。(中略)今でも思い出すのは中学2年の前期の英語のテストで過去最悪5点でした。さすがに自分でもここまで嫌いなのかと思うくらいびっくりしました。親には見せずに点数も適当にごまかしてあります。」

このように当時の辛い心情を語っていた学生が前期末の授業レポートでは「高校より勉強している内容はレベルアップしているかもしれませんが、とても楽しい授業が受けられました」と述べています。英語に関して教えている内容は、文法においては「語順」、音法においては「リズム」という基本中の基本に絞り込んでいるのですが、それにもかかわらず彼が私の授業を「内容がレベルアップ」と評価しているのはどうしてでしょうか。

「基本的」と「レベルが高い」—この2つの言葉は明らかに相矛盾していますが、しかし彼の中では全く矛盾していません。それは扱っている英文の内容が大学生の知的レベルに合った内容を持っているからです。さらにつけ加えるならば彼が「楽しい」と書いているところにも注目してください。この言葉は他の学生の授業レポートの中にもしばしば出てきます。この3つの言葉—「基本的」「レベルが高い」「楽しい」—は私が自分の授業の目標としているものです。まず「レベルが高い」から説明を始めます。

## 2.1 私にとっての「発見」と「感動」の題材群

まず最初にわたしが実際に使ってきた教材の主なものを時系列順で掲げてみます。どの英文も自分自身が実際に読んでみて、それまでの自分の認識が覆されたり心を打つ感動を与えられたものです。私にとっての「目から鱗」の「胸打つ」の英文です。

- (1) キング牧師とバス乗車拒否：カープールの組織、歩く老婦人（2006年度）
- (2) 黒人詩人ヒューズ：「母から息子へ」「アメリカを再びアメリカに」（同上）
- (3) GM社の外部効果：社内で秘かに行われていた「費用便益分析」（2007年度）
- (4) マックとコークの拡販：学校進出と健康被害、少女クリスチナの勇気（同上）
- (5) 日系米人の苦難：真珠湾爆撃で収容所に。従軍で傷つく青年。（2008年度）
- (6) ボトル水の嘘：中身は水道水、取水で環境破壊（2009年度）
- (7) グラム、ハワイの声：沖縄基地は「移設」ではなく「廃止」（2010年度）
- (8) 20年後のベラルーシ：健康な子供はわずか2割（2011年度）
- (9) 原子力「平和利用」：日本最初の原発候補地はヒロシマだった（同上）
- (10) M.ムーアの訴え：「"企業"のための合州国はまっぴらだ！」（2012年度）
- (11) ジャン・バルジャンの決意：「あらたな人生を始めるんだ！」（2013年度）

それぞれの題材の説明を1行に収まるように要約しましたので、これだけではまだよく分からないと思います。そこで次節からは上記の題材のいくつかを取り上げて、それがどのようにして私の目から鱗を落とし心を揺さぶる感動を与えたのかを述べます。

### 2.1.1 背筋が寒くなる計算式の話 — 天秤に掛けられる人命と設計コスト

まず(3)「GM社の外部効果」について述べます。この英文に出会うきっかけは私の研究会の代表である寺島隆吉氏が『ザ・コーポレイション』（2004, カナダ）というドキュメンタリー映画を推奨されたことでした。この映画は企業が生まれた歴史から語り始めます。誕生したときは政府方針の道具であった企業が「法人」として認められて人間と同じような権利や自由を与えられようになると巨大化して社会を支配する存在となります。その企業を「人間」と見立てて精神分析テストを行なってみるとその結果は完全な「人格障害」という判定が出ました。衝撃的な実例が簡潔な解説とともに小気味よいテンポで紹介されていきます。これなら授業で見せても「学生は寝ない」と確信させる内容でした。（授業ではもちろん何回かに分けて解説を加えながら見せましたが。）

そこでこの映画の元になっている原著と訳本を取り寄せて教材化する部分を探しました。私は原著の中から、企業が収益を上げるために社会に犠牲を負わせる「負の外部性」の説明とその実例として出ているGM車シボレー・マリブの追突事故の話を取りあげました。家族4人が大やけどを負った事故の審理の中でGM社が社内で秘かに行っていた計算式が明らかにされます。もし後ろから衝突したら燃料タンクが爆発する可能性が高いがその設計変更を行うと余分にお金がかかる。その余分のお金と事故が起こって死亡事故が起きたときに支払うコストを天秤にかけます。そしてこの「費用便益分析」では後者の方がお金がかからないことがわかり車の設計変更は見送られるのです。

テレビでは毎日くり返して新車のコマーシャルが流されていますが、私はこの英文を読んだときに毎年のように報じられる大量の車のリコールのことが思い浮かび、「もしや日本でも・・・」「自分の車は・・・」と考えて背筋が凍る思いでした。授業でこの英文を読んだ後では学生に自分の身近なところにある企業の外部性の実例を正と負に分けて考えさせてみました。

この英文を読んだことがきっかけとなって(4)と(6)の題材選択につながりました。次節ではこの2つのうちの(4)について説明します。[なお、(8)の題材も企業が収益を上げるために社会を犠牲にする「負の外部性」の実例と言えるでしょう。<資料2>]

### 2.1.2 勇気と希望を与える少女の話— "Stop the Pop!" のポスターは消えたが…

題材(4)「マックとコークの拡販」との出会いは偶然見つけた『おいしいハンバーガーの怖い話』(2007, 草思社)という訳本でした。私は以前から「不健康食品」ファストフードについては関心が高かったのですが、この本を読んでその誕生の歴史、企業の拡販戦略、製品のなりたち、深刻な健康被害などの驚くべき事実をたくさん知ることができました。すぐに原著 *Chew On This* (Eric Schlosser, 2006) を取り寄せました。

この本は著者が全米の大学で指定図書にもなった前著 *Fast Food Nation* (2001) を若者向けに書き改めてさらに新しい内容をつけ加えたものです。実際に読んでみると語彙も平易で文章もわかりやすく教材化するにはうってつけの内容と形式を持った英文でした。しかもこの本も前著同様、「#1 NATIONAL BESTSELLER」になっています。

またこの原著について調べる過程で *Supersize Me* (Morgan Spurlock, 2004, 米国) というドキュメンタリー映画があることも分かりました。監督自身が1ヶ月間マック製品を食べ続けて体の変化を記録するという内容で、この英文 *Chew On This* の背景資料として見せるのには最適のものでした。しかも本編映像の付録には著者シュローサーと映画監督スパロックとの対談まで付いています。

さてこのようにして選んだ英文でしたが全文10章を読むのはもちろん長すぎます。そこで私は第6章を選択しました。その理由はその章にはエスキモー・ユピック族のクリスチナ・クラークという少女が自分の通っている学校の清涼飲料水自販機を撤去させた話が載っていたからです。私は彼女の勇気と行動力に心を打たれました。彼女は自分の家族も含めて多くのエスキモーが清涼飲料水の飲み過ぎで虫歯になりその結果歯がなくなってしまっている現状に心を痛めていました。母と一緒に健康クリニックを訪れてコーラの飲み過ぎの害について学んだクリスチナは自らがポスターを作って校内に貼ったり(このポスターは2週間で消えてしまいましたが) また児童会で提案するなどしてついには自校から自販機を追放しました。この英文は私にとっては「発見」だけでなく「感動」の題材でもあったわけです。

この英文を読んだ後で学生が書いたレポートの中には、未知の情報を知って驚いたという声に混じって自分自身の「カップ麺体験」を綴った学生もいました。この題材は学生たちにマックやコークなどの「非常に身近な食品(正確には「製品」)」について考える機会を与えるものでしたが、折しもこの年(2007年)は「赤福」「ミートホープ」などの食品偽装が次々と明らかになった年でもありました。現実が題材を後追いついてきたという感じですが、次節で説明する(7)(8)の題材については現実と同時進行で読んでいった題材で

した。

### 2.1.3. 現実を読み解くヒントを与える英文

次に紹介する 2 つの題材は米国の独立系放送局 DemocracyNow!(日本語サイト: DemocracyNow!Japan)から放送された番組から取っています。この放送局は企業や政府からの広告やお金を受け取らず有志のカンパで運営されていますので CNN や FOX などの大手メディアが伝えないことや政府に都合が悪い情報も伝えます。この番組を知ったきっかけは私がファストフードに関する題材(4)を使っていることを知った寺島隆吉氏(JAASET 代表)から関連の内容として "Bottled Water Lies"という特集番組が上記のサイトにあると教えてもらったことでした。[ちなみに、この「ボトル水の嘘」[リスト(6)]という番組ではペプシ製「アクアフィナ」の中身が水道水であることが告発されていました。私はその年の3年前に学生を引率してロサンゼルス語学学校に3週間ほど滞在したのですが、まさにそのボトル水を私は「水道水でお腹をこわさないように」と考えて何十本も購入して飲んでいました。]

#### 2.1.3.1 沖縄からグアム、ハワイへ — 米軍基地「移設」に騙されない

題材(7)「グアム、ハワイの声」は2010年5月に放送された番組です。ちょうど当時の首相が沖縄の普天間基地について「国外に移設する。最低でも県外に」と言っていたときでした。私自身は「県外ではなく国外(米国内のグアム島)へ移すべきだ」と思っていました。ところがこのインタビューにはグアムとハワイの人が出演して次のように発言していました。

「グアムに移設されても人口は五割増になり水の供給ができず住民の生活環境が破壊される」「ハワイのオアフ島には米国の太平洋軍司令部があるが、それをタコの頭に喩えるとハワイから伸びた触手が沖縄やグアムやフィリピンや韓国を締め付けている。それぞれのタコの足を切ってもまた生えてくる。タコの頭を抑えないかぎり個別に基地を追い出してもいずれまた戻ってくる」

つまり米軍基地を日本から追い出すだけでは問題の解決にはならず、戦略基地の拡大に反対する国際的な連帯を考えなくてはこの問題は解決できないのです。私はこの番組を見て米軍基地には「移設」ではなくて「廃止」という選択肢もあることに初めて気づきました。大手メディアの報じる情報だけを聞いていた私はそれが与える枠組みの中でしか思考できなくなっていたのです。

沖縄出身のある男子学生はこの英文を読んで「同時多発テロのときは沖縄の基地が危ないということで観光客が減りました。基地がなければもっと平和でいい島になると思います」と書いていました。私は彼の文を授業で紹介したときに自分がその当時に勤務していた高校の職員会議で修学旅行先の変更を議論していたことを話しました。

この事実は米軍基地が敵からの攻撃に対する「抑止力」ではなくてむしろ「誘発力」になっていることを物語っているのですが、このとき私はそのことがまだよく分かりませんでした。言葉の教師の一人として為政者が使う(そしてマスメディアがそのまま繰り返して使う)言葉のトリックを見破る力の必要性を感じます。

### 2.1.3.2 ベラルーシの 25 年後 — 「直ちに影響はない」の本当の意味

題材(8)「20 年後のベラルーシ」はチェルノブイリ原発事故 25 周年の特集番組 (DemocracyNow!2011/04/26)から取りました。福島第一原発事故が起こった翌月の放送です。二人の医師が出演したインタビュー番組の内容は次のようなものでした。

1. 記録映画『チェルノブイリ・ハート』(一部)：子供たちの現況
2. パターソン医師：無防備な除染作業、消される被爆記録
3. シャーマン医師：石棺から漏れる高放射能、進まぬ新石棺建設
4. パターソン医師：広島 の 400 倍の被害、後生にも引き継がれる影響
5. 25 周年行事でのロシア人環境保護活動家の話
6. メドベージェフ・ロシア大統領とオバマ・米国大統領のスピーチ
7. パターソン医師：原子力の 3 つの危険、どこにも逃げ場のない核惨事
8. シャーマン医師：全生物への影響、ベラルーシでは健康な子供は 20 %
9. パターソン医師：不当な被爆許容限度量の引き上げ

とりわけシャーマンという女性の医師が語った「ベラルーシではいま健康な子どもは 2 割しかいない、こんな社会で将来いったい誰が芸術家や音楽家になるのか、科学者や教師になるものはいるのか」という言葉は私の心に重くのしかかるものでした。そして同時に私は事故直後の記者会見で官房長官がくり返して述べていた「直ちに人体や健康に影響を及ぼす数値ではない」という発言の本当の意味を知ることになりました。

2011 年度はこの英文とともにリスト(9)に紹介した *Peter Kuznick, Japan's Nuclear History in Perspective: Eisenhower and Atoms for War and Peace* という英文も読みました。これは *Peace Philosophy Center* という日本語サイトで見つけました。原爆の被害を受けた日本になぜ原発があるのか、という疑問に答える英文です。事故後ずいぶん経ってから一般の新聞でも日本への原発導入の歴史を検証する記事を掲載し始めましたが、この記事はそれよりもずっと前の 2011 年 4 月 13 日に出ていました。この英文も英語が読めると重要な情報がいち早く手に入る好例と言えます。このような「英語が読めると得する」という実例を示してこそ教師は学生に「英語を学ぶ意義」を説けるのではないのでしょうか。

これらの英文を読む授業では毎時間必ずひとつずつ関連の映像を見せました。学生たちが印象に残ったと書いているものには、記録映画『チェルノブイリ・ハート』、日本列島地震再現動画(9 分)、ラップ音楽『Human ERROR』(23 分)などがあります。この題材に対する学生の関心は非常に高く授業開始前に「今日の拡散予想はどうなってますか」「先週の歌はよかったのもう一回聞かせてください」と話しかけてくる学生がいました。また卒業式後の記念パーティの席で「卒論のテーマは原発にしました」と言ってきた男子学生もいて驚かされました。(なお、ここで紹介した英文や映像資料などは寺島研究室「福島原発資料」<http://www42.tok2.com/home/ieas/fukusima.html> にリンクが紹介してあります。)

最後にひとつ付け加えておきたいことは、授業ではつねに「このような事実もあることを知らせる」という立場だったことです。「このような情報はテレビや新聞には出てこないから英文で読んでいる。どちらを信じるかは自分の頭で考えること」といつも言ってきました。ですから最終レポートにはテーマに対して多様な意見が書かれています。また学生の声から逆にこちらが学ぶこともあります。前節で作文を紹介した沖縄の男子学生は印象に残った英文として *There was a major protest, 100,000 people in Okinawa protesting the*

construction of a new US military airbase。という文を上げその理由を次のように述べていました。「自分もこの 10 万人集まった県民運動に参加した一人だったからです。今、ニュースでは、基地に反対している人が映し出されているが、実際は、反対していない人もいるのでこの英文が心に残りました。」私は沖縄の現実が抱える複雑な一面を教えられました。

## 2.2 題材選択の視点 — 「人間教育」としての英語教育を！

ここまで題材リストに挙げた 11 個の英文のうちの 4 つを説明しましたが、私がこれらの英文を「発見」と「感動」と呼んだ理由を理解してもらえたのではないかと思います。もちろんこれはあくまで教える側の主観による判断ですので、教師はそれを相手がどのように受け取っているかを知る必要があります。そこで私は学期末のレポートに「印象に残った英文（映像）とその選定理由」「英文を読んで疑問に思ったこと」「私が発見したこと」「教師への要望」などの設問を設けて学生たちの反応や声を知るように努めています。冒頭に紹介した学生の声もこうして書かせたレポートの中にあつたものです。

学習を楽しくする要因として寺島・寺島美(2004: 12)は「まず第 1 に大切なのは教材が読んでいて面白く、かつ何かと考えさせる内容を持っていることです。(中略)本格的に英語学習を始める中学生ですら、国語教科書で読んでいる内容は夏目漱石や芥川龍之介など極めて高度な内容です。ところが英語学習になったとたんに、小学生の内容になってしまったのでは、学習意欲が半減します」と述べています。

このことを裏付ける指摘として青木(1987: 140)があります。彼女は「大学に入学してきた学生に中学での英語学習の思い出を聞くと「関係代名詞」や「受身形」を何年生で習ったかという記憶は定かではないが、良かったと思う話をあげさせると "The Big Dipper" や「くもの糸」などの文学作品の名前を挙げる。彼らの英語学習の思い出は言語材料ではなくて教材の題材である」(山田による要約)と述べています。英語教育にとって題材選択がいかに重要であるかが分かります。

当学会の紀要の中でこれまでに「題材」について論じたものには、この青木の論考の他には中山(1980,1990)、江利川(1991,1992)などがありますが、この中でもとくに江利川(1991: 287)が明治以降の教科書を調べて「教科書の題材がその時代の〈社会経済的関係〉に規定されてきた」と論じていることは重要です。自分が題材を「自由に」選択していると思っても実はその時代の「社会経済的関係」に規定されているかもしれないのです。この問題については大学の教師はとくに真剣に検証する必要があるのではないのでしょうか。教科書を使わざるをえない中学校や高校の教師に比べてはるかに大きな題材選択の自由を享受しているのですから。

いま「自由に」題材を選んでいると書きましたが、明らかに「不自由に」選ばれていると感じることを私は経験しています。いまこの状況は改善されて希望者受験に変わりましたが、私の大学では 3 年前まで二三年生全員に ToEIC を受験させていたのです。本論の冒頭で紹介した寺島氏の毎日新聞インタビューで「かつてジャパン・アズ・ナンバーワンと言われた 1990 年代初期に、私はアメリカの大学で日本語を教えていた。そのころ、企業は社員を会話学校や海外の大学に送って必要な語学力を身につけさせていた。今、そのお金が惜しくなったから責任を学校に転化させているだけではないか」と述べていますが、多くの大学がこのような資格試験を無視できずにその問題集を授業でやらざるを得ない状

況に追い込まれているのはまさにこの「社会経済的關係」が引き起こしている悲劇とは言えないでしょうか。

江利川(1991: 287)はまた「人間教育の一環である英語科教育が〈何を〉教えるべきかという題材への関心を忘れてはいけない」と述べ「人間教育」を題材選択基準にすることを提起していますが、徳田(1980: 182)は歴史的な見地からもその考えを支持しています。

「しかし、近代の学校教育は、中世の〈読み・書き・ソロバン〉的な次元の低い実用オンリーの教育から大きく脱皮、進展した。それは、どの学科をとっても直接的な日常性や実用だけが、最大目標ではない、ということである。直接的実用性から本質的な人間教育、国民教育に向かって飛躍した。これは近代教育の原則である。」

日本人は日常生活において英語をほとんど使わない EFL 環境の中で生活しているにもかかわらず、英語の「直接的実用性」が全ての日本人に必要であるという「幻想」を信じ込まされています。そのような状況の中では英語教師こそがまずこの「近代教育の原則」を自覚して英語教育を「人間教育」という原点に立ち戻らせる必要があるのではないのでしょうか。

(なお、このような英語教育に関する「幻想」については、寺島(2009)が「英語力」をつけると金持ちになる(出世できる)、「英語力」をつけると国際的な感覚が身につく、「英語力」をつけると優れた創造的研究ができるといった「幻想」もあるのではないかと論じています。論証のために提示される数々の事例に私は大きな説得力を感じました。この「幻想」に関して言い添えますと、昨今わたしは〈英会話をすると日本語のコミュニケーション能力が身につく〉という話を聞くようになりました。確かに英語で会話すれば黙っているのと比べれば「コミュニケーション」をしているにちがいはありませんが、「母語」ですら満足に「コミュニケーション」が成立しないのに(3.5節で子どもたちの日本語力低下について言及しました)、その力を英会話でつけるというのはどう考えても無理がありません。これは英会話をやるのが先に決まっていて「後付」で考えられた理屈ではないのでしょうか。私には新たに作り出された「幻想」としか思えません。)

### 3. 「難しい」英文を「易しく」「楽しく」読むために

さてみなさんの中には「ではこのような題材を扱った本格的で難しい英文をどのように教材化して教室で与えているのか」という疑問を持つ方がいると思います。本論の最初に英語が大嫌いな学生の作文を載せましたので、そう思われるのも当然です。実際、彼のような学生が大半です。では本節ではその点について説明します。

#### 3.1 英文を読みたくさせるもの — 映像と音楽、そして日本語資料

まず最初に難しい英文を読みたくさせるために私が行っていることを述べます。それは予備知識、つまりコンテンツ・スキーマを与えることです。映像と音楽が大きな役割を果たします。さらにこれから読む英文の内容を日本語で知っておくことも英語学習を楽しく持続させる鍵になります。英語を読む前にその内容を知っておくというのは英文を読む楽しさを削ぐのではないかと思われるかもしれませんが、実際はその逆です。というのは日本語で知らない(あるいは理解できない)内容は英語でも分からないからです。2年前にも私はこのことを身をもって体験しました。エジプトの民衆蜂起についてチョムスキーが



語ったインタビューの和訳を試みたのですが、中東の現状や歴史をよく知らない私は文の構造は分かっても意味は分からないことがたびたびありました。

### 3.1.1 私が英語完全版『レ・ミゼラブル』を読みたくなるまで

英文を読む前に予備知識を得ることの重要性については、私がつい最近に体験した「英語学習」でも感じました。本節ではその体験について述べます。

今年度はリスト(11)に示したように『レ・ミゼラブル』を題材に取りあげているのですが、私が最初(2013年1月)にDVDでミュージカルを観てから英語の完全版原書(1463ページ)を取り寄せて読みたいと思うまでには4ヶ月の期間が必要でした。その過程を遡ってみると次のようになります。

1. ミュージカルのDVD映像『25周年記念ロンドン公演』を観る
  - 見終わって感動のあまり"Who am I? I'm Jan Valjean."と叫んでしまう。妻からは失笑されるが、娘は似ていると褒めてくれる。
2. 少年少女世界の名作・フランス編『ああ無情』(小学館)を二晩かかって読む
  - ミュージカルには物語の大幅な省略があることを知る。
3. ミュージカルのDVD映像『25周年記念ロンドン公演』を再び観る
  - 話の展開がよく分かり感銘はさらに深まる。その後も数回分割で観る。
4. 映画館で『レ・ミゼラブル』(2012年12月封切り)を妻と観る
  - 映像の迫力と音楽のすばらしさに圧倒される。一緒に観た妻は歌唱力、聴衆の歓声などからステージ版も捨てがたいと評する。
5. 毎夜ネットで『レ・ミゼ』の動画や歌詞サイトを見るようになる
  - とりわけ「民衆の歌 Do You Hear the People Sing?」の歌詞に魅了される。
6. 岩波少年文庫『レ・ミゼラブル』(全2巻)を三日がかりで読む
  - ストーリーの展開に引き込まれて読む。時代が感じられる挿絵が魅力的。
7. 映画館で『レ・ミゼラブル』を今度は娘と一緒に観る
  - 娘に「死ぬときはお前が "Your father is a saint." と言われるようになりたい」と話すと「父さんはクリスチャンじゃないでしょ」とあしらわれる。
8. 映画『レ・ミゼラブル』の全文スクリプトをネットで見つける
  - 音声教材として採用したい "Who Am I?" の一部に文構造不明の箇所を見つける。最初は誤植かと思うが、他行との関連も考えて解明できる
9. 映画『レ・ミゼラブル』のCDを取り寄せて車の中で聞き始める
  - リズムよみ教材として使う4曲を決める。バルジャンの心中の葛藤が語られる "Soliloquy"と"Who Am I?"は「表現読み」に挑戦させたいと思う。
10. 『レ・ミゼラブル』の易しいテキストを3種類取り寄せて目を通す
  - 語彙・構文レベルから読み取りの教材化に適切なものをひとつ選定する。
11. 前期に使う2曲のリズムよみプリントを作り始める
  - 2曲目に選んだ "Soliloquy"「独白」の記号付けには苦勞する。2週間かかって歌えるように。ただ道に面した風呂場で歌うことは家人に禁止される。
12. 選んだテキストで読解プリントを作り始める
  - プリントのレイアウトが決まるまでに試行錯誤を重ねる。語義ヒント欄にエ

クセルを使うと作成時間が大幅に短縮されることが分かる。

13. 『レ・ミゼラブル』(新潮社版・全3巻)を借りて3週間かかって読了
  - 裁判所に申し出るまでの葛藤やマリウスにコゼットを奪われると悩むバルジャンの苦悩を描いた場面は完全版でしか味わえない感銘を受ける。
14. 『世界史講義録』というサイトで「フランス革命 1/2/3」を読む
  - 王政、共和制、帝政と激動する歴史を思い出す。物語に登場する「ラマルク 将軍」については別のサイトで調べてみる。
15. 『レ・ミゼラブル』の英語完全版を取り寄せて読み始める
  - 好きな場面を拾い読みする。固有名詞が分かるのでよく理解できる。

私はこのような道のりをたどった末にやっと分厚い英語版原書を手にとって読みたい気持ちになりました。英文を読むまでにはずいぶん長い時間がかかっていると思われるでしょうが、ここに至る、予備知識を知るためのプロセス自体がとても楽しい「英語学習」になっているのです。そしてその後も私の「英語学習」は続きます。

### 3.1.2 広がる好奇心、新たな発見 — やめられない、とまらない「英語学習」

英語の完全版でお気に入りの場面の拾い読みしていると、ストーリーの展開はもう分かっているのにまた胸が感動で高まってきます。この作品が名作たる所以でしょう。

しばらくして今度はフランス革命の前後のことも知りたくなりました。前に読んだサイト(14)が一冊の本にまとめられていることがわかり浅野(2012)を取り寄せました。私が世界史の本を読むのは高校の受験勉強のとき以来です。この本はエピソードが豊富でそれが歴史の流れを理解する補助線となっているので「物語」を読むように読めます。毎日寝る前に少しずつ拾い読みするのが楽しみになりました。王様や軍人が意のままに振る舞っていた時代から憲法ができて世の中が少しずつ変わってきたのだなといま改めて憲法の大切さを感じています。(なおこの本は2巻で千頁近くになりますが、大人が読むということでは人気の『山川の世界史』より確実に面白い読み物です。私は受験生の定番参考書になるのではないかと思います。)

バルジャンの独白の台詞「目には目を」を理解するために宗教史に関する本も読みました。浅野(2009)を読んで司教の行動は「下着を取ろうとする者には上着も与えよ」というキリストの教えに通じるものがあることが分かりました。

また、司教が銀の燭台もバルジャンに与える場面からサローヤン『人間喜劇』の中の「強盗」の話の連想したり、生涯で一度も嘘をついたことのない修道女サンプリスがバルジャンをかばって嘘をつく場面は映画『サウンド・オブ・ミュージック』で修道女がトラップ一家を追っ手から助けるシーンと重なってきました。これらの作者もこの名作を読んでいるに違いないと思いました。

この「英語学習」は、実際のところは「英語を学んだ」と言うよりはむしろ英語を通して「楽しいときを過ごし同時に人間の生き方や歴史・社会についてもいろいろ考えた」と言ったほうがより実感に近いものです。「外国語の習得には時間がかかり、楽しみながら持続できる「易行道(いぎょうどう)」でしか成功しない」(寺島・寺島美 2004: 14)のであるならば、英語教師は英語の授業をこのような発想でデザインすることをもっと考えてもいいのではないのでしょうか。

(なお、最後に付け加えますと、この題材は、いま実践中で結論的なことは言えませんが、「映像(映画)」「歌」「英文」が三位一体となったすぐれた英語教材になる可能性を秘めています。そのような題材はこれまで "Dear America"(寺島 2000 : 125-147)や "The Sound Of Music"(岩井 2006 : 37-45) の他には出会ったことがありません。)

### 3.2 私の学生時代の「苦行道」と「易行道」 — 決め手は「楽しさ」

いま私は自分自身のごく最近に経験した「易行道」について述べましたが、学生時代にそれはなかったのかと考えてみました。すると幾多の「苦行道」の中に確かに「易行道」もあることに気づきました。

まず最初に「苦行道」の方から始めます。高校生のときの勉強は間違いなくこちらです。たしかに *A whale is no more a mammal than a horse is.* のような個別の英文は頭に残っているのですが。教科書で読んだ英語の内容は何ひとつ覚えていません。教科書の他には、単語集を三冊片付けラジオ講座を聞き『山貞』や『原仙』をやり切りましたが、しかしその「英語学習」の喜びはテストの点が上がったときにだけ感じるものでした。

大学に入ってからいちばん記憶に残っている「苦行道」は第2外国語でとったドイツ語の授業です。小さい副読本のようなものを読んでいましたが、たった1行でも分からない単語がいくつも出て来てうんざりでした。辞書ばかり引いていました。さらに文法もよく理解できていないのですから話の内容が分かるはずもありません。どうやってテストをパスしたのか今は全く覚えていませんが、「可」という成績が全てを物語っています。

一方、専攻していた英語の授業では「易行道」と言えるものがふたつありました。ひとつはイングリシ先生の英会話の授業です。この先生は元 BBC のアナウンサーをやっていたというイギリス出身の人で、授業では英会話をやらずにラジオ番組の放送原稿を学生に演じさせました。"L is for the way you look at me / O is for the only one I see / V is very, very extraordinary / E is even more than anyone that you adore can ..."という歌は今も覚えています。テスト課題は友達と組んで自分たちが選んだスキットを演じることでした。私は仲のよい子とペアになってセサミストリートの Ernie と Bert のやりとりを演じました。二人の会話はいつも最後に Bert がやりこめられるオチがあって Ernie が独特の品のない笑い方をするとところで終わるのですが、これをそっくりそのまま演じるので教室には大爆笑が起きました。(それ以来わたしは「真面目そうな顔をしているが実はこっけいな人間」という評価を級友から受けることになりました。これはほとんど正しい評価で私は以前から「真面目」でもあり同時に「滑稽」でもありました。「英会話」によって「真面目な性格」が「こっけいな性格」に変わったのではありません。念のため。)

もうひとつの「易行道」は英作文を担当されていた金山先生の夏休みの宿題でした。宿題が楽しい、というのはあり得ない話だと思われるかもしれませんが、金山先生が出した課題は「何でもいいのでひとつの小説を英訳してくる」というものでした。私は悪知恵を働かせてもっとも短い話を探しました。そして星新一のショート・ショート「おーい、出てこい」を英訳しました。和英辞典と格闘しながらの作業でしたが面白い話なのであまり苦にはなりません。金山先生は課題を返すときに勘違いされて「君はこの話を自分で考えたのかい？」と聞かれました。私はしっかり意味が伝わったのだと誇らしく思いました。(教員になってずいぶん経ってからこの話が中学校の教科書に入ったことを知りと

でも嬉しかったです。また 2 年前の 3.11 事故の後にはまたこの話を思い出すことになりました。(行き場のない「核のゴミ」を予言した話として。)

大学の授業以外で経験した「易行道」もひとつあります。それはアガサ・クリスティの推理小説を何冊も読んだことです。これを読み始めた動機は教員採用の面接で「君は在学中に何冊の英語の本を読みましたか」と英語で尋ねられたことです。私は最初から最後まで読んだ本は授業で読んだテキストぐらいしかなかったので「4 冊」と答えたのですが、どういうわけか面接官は「14 冊」(あるいは「40 冊」だったかもしれません)と聞き間違えて感心したような表情を浮かべました。ところがそれから面接官はすぐに次の質問に移ったので私は訂正するチャンスを逃してしまいました。そのままでは私は良心が許しませんでしたので、その贖罪のために卒業までに何でもいからあと最低 10 冊は読もうと決意して読み始めたのです。しかし読み始めてみるとどんどん引き込まれて読むことになりました。英語を読むことを楽しんだのはこのときが初めてでした。ちょうどこの年の前年 1976 年にクリスティが亡くなったのですが、彼女の最後の作品 *Curtain: Poirot's Last Case* を読んだことが懐かしく思い出されます。

長々とした体験談になりましたが、語学の学習を「苦行道」にするか「易行道」にするかの分かれ道はやはり「楽しさ」「面白さ」にあるように思えます。次節ではいま述べた体験中から私のもっとも悲惨な「苦行道」だったドイツ語学習を元にして英語学習において「語義を与える」ことについて考えてみます。

### 3.3 語義は本当に全て与えていいのか — 私のドイツ語、学生の英語

私は自分の体験から「英語の勉強は辞書引きに始まり辞書引きに終わる」とずっと信じてきました。高校の時に使っていた辞書は元の箱には収まらないぐらいに大きくなりました。教員になってからもその辞書信仰はつづき、新任校のときは単語の意味が調べていない生徒の頭を辞書でポカリとやったこともあります。2 校目の工業高校に赴任したときも毎時間作っていった授業プリントには辞書コーナーが作ってありました。授業には辞書を必ず持ってくるように指示しました。ところが全員の生徒に辞書が持ってこさせることはなかなか困難なことでした。そしてそれを何とか全員に持ってこさせようとしたところから私の授業は崩壊の危機に直面しました。

ちょうどその頃に私は寺島氏の主催する研究会に出会い「語義は全て与える」という考え方があることを知りました。さっそくその実践をまねてプリントを作ったのですが、そのときのプリントを見ると、まだ全ての単語に意味が与えられてはいません。私の辞書信仰がいかに根強いものであったかが分かります。それでも 3 校目の普通科高校(困難校)で教える頃になると全ての単語に語義を与えた方が授業がスムーズに進むことが分かってきてそのような授業プリントを作り始めました。(一方で、「辞書を持ってこい」と言わなくても生徒が持ってくる方法も分かってきました。)

この学校で教え始めて数年経ったところに他の先生と共同でプリントを作るようになりました。ところがあるとき代名詞の意味を入れるか入れないかで意見が分かれしました。その先生は代名詞の意味は一覧表をつけておいて生徒はそこを見ればいいという考えでした。そこでそのレッスンのプリントは代名詞の意味を載せずに作りました。ところが生徒の和訳を見ると代名詞の意味だけを飛ばして訳しているのです。一覧表があっても生徒はいち

いちそこを見ないので。

大学で教え始めてからも「全ての単語に語義を与える」という方法は続けています。そうすると、教室で全員に指名して授業を進めることができ、さらには私がいちばん教えたいこと（読解の授業においては語順認識）に絞って教えることができます。そしてそうすることによって、たくさん英文を読むことができます。せっかく「発見」と「感動」の英文を用意しても1コマで数行読むだけではそれを味わうことはできません。

いちばん最近に作った読解プリントでは語義をまとめて与えることを実験的に始めました。どういうことかという、「形容詞＋名詞」からなる名詞句の意味をまとめて与えておくのです。こうすることで語順認識をより効果的に理解することができるのではないかと考えたのです。動詞句については「助動詞・本動詞」の順序のままで語義を与えます。この授業では「どこが動詞ですか？」と問いながらフレーズ訳を言わせていますので、語義のヒントはその答えを言うときにも役立ちます。（実際のプリントでは語義は右側にある）

Years ago I stole a loaf of bread to feed my hungry family.

何年も前に 私は 盗んだ 一切れのパン → ～に食べ物を与える 私の空腹な家族

For nineteen years, I was known as a number 24601.

19年間 私は あった・知られて ～として 24601 という番号

英語学習において「語義を全て与えること」、さらには「それを句単位で与えること」の意味について述べてきましたが、このように振り返ってみると、英語が苦手な学習者にとっての「英語」は私にとっての「ドイツ語」であることがわかります。もし私が大学の第2外国語の授業で単語の意味を全て与えられていたならば、テキストに書かれていた内容が理解できて授業はもっと楽しいものになったかもしれません。

Nation(2001)は「読んでいる英語の語彙の95%を知っていなければ、あとの5%は推測しようがない」と述べています。ということは94%の単語に語義が与えられていても英文の意味を完全に理解することはできないということになります。プリント作成上の都合から言っても、どれに付けてどれに付けないかを考えることはかえって面倒ですし、さらに言えば人によって分からない単語は異なるのですから、やはり全てに付けたほうがよいように思えてきます。以上のようなことから、「語義は全て与えて楽しい授業を作るほうがいい」というの当面のわたしの結論です。

### 3.4 映像のある英文を選ぶ — 事実と感動を伝える映像のパワー

前節では英語学習を「易行道」、つまり楽しくて長続きさせるものとして「語義」を与えることの大切さについて論じてきましたが、この節では「映像」のもつ大きな力について述べます。最初に私が実際に授業で用いた映像の主なものを2.1節の題材リスト番号にしたがって掲げます。「字幕」「吹替」の記載のないものは全て日本語の音声です。

(1) 映画『ロング・ウォーク・ホーム(字幕)』(84分,1990,米国)

映画『ローザ・パークス物語(吹替)』(94分,NHK海外ドラマ<2002,米国)

(3) 映画『ザ・コーポレーション(字幕)』(145分,2004,カナダ)

(4) 映画『スーパーサイズ・ミー(字幕)』(98分,2004,米国)

(5) 映画『収容所の長い日々～日系人と結婚した白人女性』(45分,1991,米国)

- (6) 動画『ボトル水の嘘(字幕)』(27分, DemocracyNow!Japan 2007/08/01)
- (7) 動画『沖縄からグアム、ハワイへ(字幕)』(27分, DemocracyNow!Japan 2010/05/08)  
映像『米軍基地は必要か: フィリピンの選択』(16分, OurPlanet-TV 2010/05/13)
- (8) 映画『東京原発』(110分, 2004, 日本)  
映画『夢』(120分, 1990, 日本)  
映画『チェルノブイリ・ハート(字幕)』(61分, 2003, 米国)
- (9) 映像『原発導入のシナリオ』(44分, NHK 現代スクープ・ドキュメント 1994)
- (10) 動画『米国は破産なんかしていない(字幕)』(13分, DemocracyNow!Japan 2011/03/07)  
映画『キャピタリズム(吹替)』(127分, 2010, 米国)  
映像『IVAW 明日への歩み Part 6(字幕)』(35分, 2011, マブイ・シネコープ)
- (11) 映像『レ・ミゼラブル 25周年記念コンサート(字幕)』(170分, 2010, イギリス)  
動画『レ・ミゼラブル 10周年記念コンサート(字幕)』(147分, 1955, イギリス)  
映画『レ・ミゼラブル(字幕)』(158分, 2012, イギリス)

映像の役割について寺島(2000: 128)は「学習者のコンテンツ・スキーマを確立するための最も良い情報源は映像資料であり、その次に音声資料、最後に文字情報がくる」と述べていますが、この順番は先述した『レ・ミゼ』学習で私がたどった道のりと見事に一致します。私はまず最初に映像を観て感動して、次に歌を歌ってみたくなり、それから日本語を読んで、最後に長大な英文を読む気持ちになりました。

私のこれまでの題材選択は(1)(3)(11)では「映像」→「英文」という順序でした。またその他の題材については「映像のある英文」を選んでいきます。そのように選ばれた題材でするので、私の授業で映像が英文の理解を深めるために大きな役割を果たしていることは間違いありません。しかし一方で映像をどのように見せるかについてはいくつかの留意点があります。次節ではそのことについて論じます。

### 3.5. 映像を見せることの難しさ — 「字幕」についていけない学生

まず最初に指摘したいのは学生の中には字幕の切り替わるスピードに合わせて日本語を全て読み切れないものがあるということです。私は字幕で見せていると顔を上げていた学生がだんだん少なくなることに気づいてからは、吹き替えのある映画は日本語音声で見せるようにしました。前節で掲げた題材(10)の関連映像『キャピタリズム』にはもちろん「字幕」もあるのですが「吹替」で見せました。せっかく予備知識を与えようとしても映画の内容が理解できなければ意味がありません。

ところが最近、今の子供たちは日本語の文字情報が読めないどころかその音声情報も聞き取れない状況があることを知りました。同じ研究会のある会員から青森県の公立高校の入試では「国語」の聞き取り問題が出されていると聞いたのです。私は信じられなくて青森県の教育委員会に電話して尋ねたところずいぶん前から行っているということでした。その後、『全国高校入試問題正解・国語 2013年版』を調べたところ同じような国語のリスニング問題を実施している県は他にも7県ありました。英語教師は「英語」で英語の授業をすることに頭を悩ませる前に、まず自分が授業で使っている「日本語」が学習者に確実に伝わっているのかを心配しなくてはならないのかも知れません。

このような状況をふまえて、私の最近の授業では一度に見せる映像の長さを 15 分、長くても 20 分程度にとどめるようにしています。さらに最初にその日に観る映像の中身をあらかじめ説明したり、キーワードになる英単語を 1 つだけ板書したりしています。また学生の状況を見ながら途中で画像を一旦停止させて解説を加えることもあります。

今年度の授業では 2 つのクラスで(4)の題材 *Chew On This* を使い映画 *Supersize Me* を見せていますが、先頃おこなった授業では映像 (2 回目) を見せる前に導入として新聞記事「マックが高級化路線：クォーター・パウンダー発売」(2013/05/17)を紹介してから、店で売っているバター の箱のグラム数が端数である理由を話し、pounder の er は teacher や wiper と同じ語尾であることなどを板書して説明しました。

そのときの説明の様子を少し書いておきます。この説明は 2 回行いましたが、うまく行った方の説明です。このときは学生がみんな顔を上げて聞いていました。

「クォーターってどんな意味だか分かりますか？」— 「四分の一です」

「そうだね。では、パウンドというのは重さの単位なんだけど何グラムか分かる？」— 返答なし

「僕も知らなかったんだけど、僕の妻に聞いたら知ってたよ。どうして知ってたと思う？ こんな単位は日本では使わないのよね。スーパーでバターを買うからだよ。僕もスーパーに行くけど言われたものをかごに入れるだけでそんなところを見ないから気づかないけど、妻はそのとき箱に半端なグラム数が書いてあったので不思議に思って調べたんだ。そして端数 225 g は半パウンドに当たることが分かったんだ。辞書には buy the butter by the pound (板書) という例文が出てくるくらいだから向こうの人はそうやってバターを買っているんだね。だからパウンドは 450 g ぐらいで、クォーターパウンドは 110g になる。最後に付いてる「アー」というのは -er という語尾で人や物を表すときに使います。teach する人は何て言うのかな？ 教える人ですね？」— 「ティーチャーです。」

「そう、teacher (板書) ですね。ものを表す方で言うと、車の前のガラスに付いていて雨の日に動くものがある。その名前を言えますか？」— 「ワイパーです」

「そうです。wiper (板書) と書きます。だからクォーターパウンダー (綴りを板書) は四分の一パウンドの肉が入ったものということになるのです。今日見るところではこの単語が 2 回出て来るからね。耳をすませて聞いててください。では始めます」

授業で何かを上手に説明するのはなかなか難しいことです。私は一回目はいつも一方的に話してしまいます。いずれにしても、授業で映像を見せるにはこのような前置きやたとえ 15 分であっても一旦は映像を留めて補足説明をするなどの教師の工夫が必要になります。しかしそのような手間を掛けてでも、英語の授業を単に「語学教育」だけにとどめずに「内容理解」にまで高めるには、やはり映像資料は欠かすことのできない教材と言えるでしょう。

#### 4. フレーズ単位で読みすすむリーディングの授業

さてここまで、私の授業でどのように題材を選択し、それから実際に英文を読む前までに (あるいは同時進行で) どんな方法で予備知識を与えているのかを述べましたが、本節では実際の授業でどのように英文を読んでいるのかを紹介します。今年度わたしはリーディング中心授業(R)を 2 コマ、オーラル中心の授業(O)を 4 コマ担当していますが、どちらの授業でも英文読解プリントを使っています。まず最初はリーディング中心授業(R)の様子を書きます。

#### 4.1 "My Neighbor Totoro" を読む授業（前期 1～7 時間目）

##### 4.1.1 意欲を引き出す復習テストの試み

この授業では昨年度と同様に記号付けフレーズ読みプリント(30 枚)を用いました。辞書を引かなくてもいいように全ての単語に語義が与えられています。一枚一枚点検を受けて合格したら次のプリントを受け取る「リーディング・マラソン」という方式で読みました。昨年はトップ集団に辞書を引く必要のある追加プリント 10 枚をやらせましたが、今回はトップの学生が最後のプリントに到達する前に打ち切って語順の理解を問う復習テストを実施しました。このテスト〈資料 3〉は 40 点満点で希望者は何回でも受けられます。プリント点は 10 点あってやり終えた枚数で比例配点します。(昨年の配点はテスト 20 点、プリント 30 点でした。)

どうして今回このような変更をしたかと言うと、学生を長く走らせると教師が疲れてしまうからです。昨年はプリントの配点が高いこともあり学生は得点を稼ぐためにもものすごい勢いで取り組みました。ですから採点する方は目が回るような忙しさでした。もちろんトップ層には「バトンタッチ・小先生方式」で採点を手伝ってもらっていましたが、それでもやはり遅れている学生への援助や回収した膨大なプリント処理でへとへとに疲れしました。しかもたくさん枚数をやった者が必ずしも復習テストで良い点を取らないということが分かりました。そんなわけで今年はマラソンの距離を少し短くして、さらにゆっくり走るように評価のしくみも改めたのです。

ここで少し話が変わりますが、昨年のリーディング・マラソンではそれまでに経験しなかった興味深い出来事がありました。トップを走る学生の中に最後の一枚をやらずに他事を始めるものがいたのです。小先生になって級友のプリントを採点することは面倒だと思ったのでしょうか。トップを走る学生ですのでもちろん騒いだりすることはなく他の授業の課題などに取り組んでいるようでした。若かりし頃の私だったら「君はなんと自分勝手なんだ！」などと道徳的説教をしたでしょうが、そんなことをすれば教室の雰囲気はただ悪くなるだけだということを幾多の失敗の経験から私は学んでいました。

そこで一計を案じて、最後の 5 枚のプリントの答えを黒板に貼り付けて自分で答え合わせをして提出するようにしたのです。そしてそれを提出してまた次の課題を持って行くのです。このときは動詞の意味と形を学ぶ「思考実験表」〈資料 3〉を与えました。学期の始めに取り組んだものとは異なる例文で表を埋めていくものです。この試みは見事に成功してトップ層の学生もまた動き始めました。さらによかったことは、先を走っている者が最後の 5 枚を自己採点するので教師が遅れがちな学生を援助する余裕ができたことです。

話が横道に逸れましたが、ここでまた話を元の「評価」に戻します。この復習テストは先にも述べたように希望者は何回でも受けられるようにしました。私は次のように話しました。「最後の時間に行う最終テストはもう授業がないので再試する時間はないが、こちらは何回もできるのだからやりたいと思う人はどんどん挑戦するといい。前よりも悪い点を取った場合は前の良い点を残すから安心です。最終テストも同じような形式の問題だからこの復習テストをしっかりとできるようにしておけば最後のテストもそこそこの点が取れるでしょう。」

すると何人もの学生が授業後のこの再試を受けることになりました。授業は 5 分早く終



わかることに決めていますので、その時間と休み時間の一部を使って受験します。これまでも学期の真ん中で復習の中間テストを実施したことはあったのですが、このような形態の再試は初めての試みでした。良い点を取った学生の中にも満点を目指して再挑戦するものが出てきました。私は評価のひとつであるテストが「序列化」のためではなく学生の「意欲を引き出す」ためのものにもなりうることに気づきました。これは寺島(2002: 117)で明らかにされている評価に対する考え方です。

#### 4.1.2. 「字幕」から学ぶ日本語再発見

昨年の今年もこの授業の始めの 30 分は「点呼」「映像」「文法ポイント説明」というふうになっていて、映像を見せるときは「英語音声」「日本語字幕」にしていました。学生はこの話はよく知っていますし、この授業はとにもかくにも「英語」の授業なので音声は「英語」と決めていたのです。

ところがあるクラスでひとりの女子学生が「音声を日本語にして欲しい」という要望を出してきました。隣の教室にこのアニメの日本語が聞こえると「この先生は学生を遊ばせていると受け取られないはしないか」という一抹の不安が私の心によぎったのですが、思い切ってやってみることにしました。すると毎回なかなか面白い発見に遭遇しました。

(1) 父がクスノキに向かって "Please protect her forever." と言った後で

サツキ&メイ 「これからもよろしくお願いします。」 → "Thank you."

(2) サツキが学校へ行くときに (外で友だちが待っている)

サツキ 「行ってきます。」 → "I'm coming."

(2)の例はよく指摘されるもので「行く」を相手の立場から見て「来る」と見る発想ですが、(2)はそれとはまた別で、「未来」にやってもらうことに対して"Thank you."とっています。日本語の「ありがとう」はすでにしてもらった過去のことに対して言うのに対して、英語の "Thank you." は「過去」だけでなく「未来」の行為に対しても使うことができるのです。私は以前にオーストラリアの学校にあることを依頼する文面で最後に「よろしくお願いします」とつけ加えたくて調べたときに、"Thank you for your corporation." という表現が出てきて驚いたことがあります。学生にはこの体験談も話してやりました。

次に気づいたことは、日本語の台詞は セン(マル)セン の3つの部品が全部そろわなくても意味が通じる文があることです。その台詞が出て来るたびに説明して、復習テストにも出題しました。

おまわりさん(じゃなかった)。

He (is not) a policeman.

トトロに(会っちゃった)。

We (saw) Totoro.

(やった)!

We (did) it!

今回の『トトロ』の授業では学生の要望を取り入れたことで前回とはひと味違った英語学習になりました。「セン(マル)セン」を鏡として日本語の構造を再発見し、また身近な表現にひそむ興味深い発想の違いを知ったからです。(なお、このアニメを用いた実践には江利川(2002)があります。この実践では日本語版における「沈黙」の部分に着目して日英比較を学ぶ授業を行っています。)

#### 4.2. "Chew On This" を読む授業 (前期 8 ~ 15 時間目 : 現在進行中)

#### 4.2.1. スピーディに進行する一斉授業

前期の後半は教材を変えて一斉授業の形態で授業を行っています。今回読むのは第6章の第4節の英文だけで15枚の記号付けフレーズ訳プリントになっています。この節についてはその前の節も加えて訳本から抜き刷りを作って配布してあります。

先に紹介したような導入部（出席点呼、映画の説明、映画）が終わってから、教師は書画カメラを通して前のスクリーンにプリント〈資料4〉を映し出します。座席表の順番に学生を指名して以下のようなフレーズ訳をさせていきます。

A number of fast-food companies (have created) programs

多くのファスト・フード会社はプログラムを創り出した

that (link) (doing) well [at school]

それは学校で良い成績を取ることを結びつける

[with (getting) [to (eat) [at one [of their restaurants]]]

自社のレストランのひとつで食べるようになることに

The Pizza Hut "Book it!" program often (offers) a free Personal Pan Pizza

ピザハットの「本を読もう！」プログラムはタダのピザ一枚を提供する

[to kids [in kindergarden] [through six grade]]

幼稚園から6年生の子どもたちに

who (read) certain amounts each year

その子どもたちは毎年一定量の本を読む

全て英語の下に単語の意味が書かれていますので大半の学生はすぐにフレーズ訳を答えます。このとき訳本抜き刷りを見ている学生はほとんどいません。その理由はフレーズ訳をするときにはあまり役に立たないからです。ただ、フレーズ訳をしてからの意味の確認には使えますが、ですから訳本抜き刷りは学生に安心感を与える一種の「お守り」のような役割も果たしていると言えるでしょう。

しかしときどき次のような訳をするものがあります。最初の英文を例にとって言うと「いくつかのファスト・フード会社の創り出したプログラム」のような訳です。そんなときは「マルの前は主語なので〈～は〉で始めてもう一度やってください」とヒントを与えます。

このようにして学生はフレーズ訳をしていきますが、教師はこの和訳を補助黒板に書きます。和訳を書くことは最初は日本語の聞き取りができない留学生のために始めたのですが、日本人だけのクラスでも聞き取れない学生がいることに気づいて、それからどのクラスでも板書するようになりました。指名の順番を待つあいだに一時的に睡眠を取る学生もこの板書の恩恵を受けています。またこの板書によって教師が次のような線や[ ]の記号や若干の説明を書き加えられて便利になりました。

多くのファスト・フード会社はプログラムを創り出した

[ それは学校で良い成績を取ることを結びつける

自社のレストランのひとつで食べるようになることに ]

link A with B AをBと結びつける

ピザハットの「本を読もう！」プログラムは無料のピザ一枚を提供する

幼稚園から6年生の子どもたちに

[ その子どもたちは毎年一定量の本を読む ]

この板書を使って下線と[ ]の修飾・被修飾の関係に注目させ、ひとまとまりの日本語を教師が言ったり学生に言わせることがあります。また、**have created** のような動詞句については「これは完了形なので〈プログラムを創り出して今もそのプログラムはある〉ということですね」と説明しますが、板書まではしません。これは学ばせる文法項目を当面的間は語順の問題だけに絞っているからです。

(いま述べた口頭でひとまとまりの日本語を学生に言わせることについては、寺島隆吉氏から「日英における修飾関係の差異を理解することの困難さを考えると口頭だけではなくその文を書かせることも必要ではないか」という指摘を受けました。フレーズ訳プリントにも『魔法の英語』(寺島・寺島美 2001)にあるような「足し算訳」欄が必要であるという指摘です。ただ全面改定には大変な時間と労力が要りますので、当面はプリント下部の余白に書かせてみようと考えています。)

#### 4.2.2. 内容を深める「問い」を投げかける

このようにして英文法に関しては「セン(マル)セン(SVO)」と「後置修飾」のことをくり返して教えていきますが、内容に関する質問もするようにしています。上記の英文はさらに以下のように続き、最後に質問をひとつしました。

Pizza Hut expanded the program not long ago  
to include preschoolers at 36,000 child-care facilities nationwide.

MacDonald's has programs  
that reward good grades with free food.

These fast-food programs seem to be well-meaning efforts  
that encourage kids to work hard at school  
— until you look closely.

They are also clever marketing schemes.

A small child  
who visits Pizza Hut  
to get free pizzas  
almost always comes with parents or grandparents,  
and maybe a brother or sister or two.

They all have to pay for their own food.

What seems like a good prize  
is also a good way  
to draw people to your restaurant.

More than 20 million elementary school students  
are now enrolled in Pizza Hut's "Book It!" program.

ここまでがこの時間に読み終えた分量です。映像を見た後の 60 分間でつごう 25 人が当たったこととなります。ここで発した質問は「5、6 年生ならタダ券を持ってひとりでその店に行くでしょ。でもお店は儲かるんです。それはどうしてかな？」というものです。実はその答えは次の文を読み進んでいくと出てくるのですが。

このようにして一文一文読んでいくプリント(15 枚)を終えると、次はその全部の英文

をまとめたプリント〈資料 5〉を使って段落ごとに小見出しをつける課題を与えます。前回の実践ではグループごとに発表させて段落ごとにまとめて「ベスト・サブタイトル」を選ばせました。さて今回はどのような「段落小見出し」が出て来るか楽しみです。

## 5. 英音法の根幹を学ぶ「リズムよみ」

さてここからは音声の指導に入っていきます。学生が私の授業を「楽しい」と評するのはこれからお話しする「リズムよみ」、より正確に言うならば「リズムよみ・グループテスト」があるからです。しかしそのテストが実際の授業でどのように行われているかを紹介する前に、まず「リズムよみ」とはどのような読み方なのか、そしてそれはどのようにして生まれたのかについて説明しておきます。

### 5.1. 「リズムよみ」はいかに生まれ、どのように発展してきたか

最初に「リズムよみ」とはどんなものかを説明します。英語の音声には強勢音と強勢音の間の時間的長さがほぼ等しいという特徴があります。この強勢音のところを強く発音すると同時に何かを叩いて音を出すと、英語の音声を持つ「強弱のリズム」を頭だけでなく体でも感じられます。英語特有の強弱のリズムをただ口で発音しているときよりもより効果的に習得できるのです。このように強勢音と打音をそろえてよむのが「リズムよみ」です。たとえば、次の英文を読むときには□のところを強くよむのと同時に何かを叩いて音も出します。

□ ◦ ◦ □ ◦ □ ◦ □ ◦ ◦ □  
What have I done? / Sweet Jesus, what have I done?

◦ □ ◦ □ ◦ ◦ □ ◦ □ ◦ □ ◦ ◦ □  
Become a thief in the night, / Become a dog on the run

寺島(2002: 203-205)によれば、氏がこの方法にたどり着いたのは定時制高校の生徒に英語の歌が歌えるようにする指導技術を模索していたときでした。楳垣(1961)がそのヒントを与えました。楳垣は自分の授業で短い物語を暗記させ、強勢語に特に力を入れて発音させる練習をし、ひと通りできるようになれば、手で教卓をトントンたたきながら、拍子を取って英語のリズムを飲み込ませることを行っていました。

寺島氏はこの方法を「リズムよみ」と名付けて自分の授業に取り入れました。そしてその練習に使う「リズムよみプリント」には東後(1977)が使っていたリズム記号を改良して採用します。東郷が□の記号の大小の区別で強弱のリズムを表していたのに対して、寺島氏は内容語には□、機能語には○を与えました。こうすることで内容語であるのに弱になる場合を小さな□で、機能語が強になるときは大きな○で表すことができるようになりました。

氏はこの実践を行うことを通して「音声の水源地」が「強弱のリズム」であることを体験的に確信するのですが、その後に Allen(1954)、太田(1965)、藤井(1986)の文献に出会ってそれが理論的にも間違いのないことを知りました。氏は大学に移ってからこの実践を発展させ、その成果を寺島(1996a, 1996b, 1996c, 1997a, 1997b, 1997c)で明らかにしています。

ます。そこでは「マクロからミクロ」という音声指導の原則が提示され、さらに「リズムよみ」から「合わせよみ」を経て「表現よみ」に至る音声指導の実践の様子が多くの学生の声とともに紹介されています。さらに寺島(2000)においては島岡丘氏の近似式仮名表記法の検証を通して音声指導の考え方、教え方をさらに深化させています。

なお、高校における「リズムよみ」の実践記録には寺島美(1987, 1990)、野澤(2002)、山田(2005)、岩井(2006)があります。また大学の実践は寺島美(2008)、山田(2013)で読むことができます。なお、寺島美(2009)は「通しよみ」という用語が最初に示された論文です。学生が「リズムよみ」「通しよみ」をへて「表現よみ」に到達する姿が描かれています。

ここで「通しよみ」「合わせよみ」について簡単に説明しておきます。「通しよみ」とは「リズムよみ」をする英文が長くなってそれを一気に通して全部よんでしまうものです。難易度の高い「リズムよみ」とも言えます。「合わせよみ」というのは英文を見ながら行う「シャドウイング」です。文字を見ながら音声の少し後を追いかけるようによみます。

## 5.2. 「英語で英語の授業」と相性がいい!? 「リズムよみ」

「リズムよみ」(その上級タスクである「通しよみ」)について言いますと、それをグループでテストを行うところが非常に重要です。そうすると教室の雰囲気がとても明るくなるからです。Krashen の Affective Filter (情意障壁) という用語を使うならば Affective Filter がどんどん「弱く」「低く」「薄く」なってくるということです。

先ごろ私はある県の「英語教育実践モデル指定校」で「リズムよみ」について講演する機会がありました。どんなふうに「英語で英語の授業」をしたらいいのかと悩んでいる先生方で会場の教室はいっぱいになりました。さらに講演の後には3回にわたって自主的な「リズムよみ」ワークショップが開催されるほど大きな反響がありました。

私はその理由を考えてみたのですが、この「リズムよみ」のグループテストはひよっとすると「英語で英語の授業」に相性が合うのかもしれないと思い始めました。どういうことかと言うと、このテストをやっているときに教室から聞こえてくる英語の量は「英会話授業」よりも桁違いに大きいし、教師と生徒の英語を話している量を比べても生徒の声ばかりが響いているからです。しかも生徒全員が英語をしゃべっています! そんなふうですから教室の雰囲気が自然に明るくなります。これは英語学習に最適な環境です。

いやそれではダメだ、「英会話」をやっていないじゃないか、という声が返ってくるかもしれませんが、この「リズムよみ・グループテスト」をやっていると不思議なことに「英会話」をやりたくなるときがあるのです。私が高校の困難校で教えているときに経験したことです。このテストのときに生徒が ALT に英語でいろいろ話しかけると言う「珍事」が起きています。(この体験については英語教授法「寺島メソッド」同好会サイト <http://kigouken.jimdo.com/> にアップされている私の講演原稿に詳しく書いてありますので興味のある方はご覧になってください。)

こんなことを書いているうちに思い出したのですが、私はこの ALT との授業で「リズムよみ・グループテスト」以外で生徒が英語で対話していたことが一度ありました。それは生徒たちに「私は誰? / Who Am I?」という作文をさせて(3文ほどのものでしたが)それを ALT に聞かせて答えを当てさせると言うものでした。キムさんという米人女性でし

たが、彼女がなかなか答えを言ってくれないので(後で聞いたら本当に分からなかったと言っていました)生徒たちは日本語や身振りも交えながら必死に説明していました。彼女はこのとき来日したばかりで日本語はまだよく分かりませんでしたので、生徒たちはこのやりとりでは英語で話す「必然性」がありました。

しかし、ふつうの「英会話」の授業では日本人同士が会話をするわけですからこのような「必然性」は何もありません。中学生ならまだしも(いや中学生でも耐えられないかもしれないませんが)高校生にもなったら(ましてや大学生なら)そういった会話の不自然さに違和感を感じるのではないのでしょうか。しかも教室の外に出ても英語を実用する機会はほとんどないので。「英会話」や「英語で英語」の授業を学校現場に押しつけようとしている人たちにはそういった子どもたちの「疑問」「戸惑い」「苛立ち」が全く見えないのでしょうか。

話が少し横道にそれましたが、ここで再び話を「リズムよみ」に戻して、次節では私が最近の授業で経験していることをお話しします。

### 5.3. 教室に吹き込む新風 — 「明るくて、楽しくて、かたくるしくない」

本節では昨年度に学生が書いた学生レポートを引用しながら「リズムよみ」が実際にどんな変化を教室にもたらしているのかを説明していきます。最初に1年生のときに単位を落として再履修生として私のクラスにやってきたある2年生男子学生の声を載せます。

この山田先生の英語の授業が始まったとき、最初はまったく来てなくて「めんどくさいし、単位おとそうかな」とずっと思っていたのですが、同じ部活の人がいるのを知り、軽い気持ちできてみたら、先生の授業は今までの先生とはちがって、明るくて、楽しくて、何かかたくるしくないところに私はすごく楽しさを覚えて、それからはなるべく欠席をひかえて先生の授業にこれたのはすごくよかったです。

彼は昨年この必修単位を落として今年は再履修生として来ているわけですからこの単位は絶対に取りたいはずで。ところが彼は「最初はまったく来てなくて「めんどくさいし、単位おとそうかな」とずっと思っていた」と書いています。英語嫌いの彼の心の中には英語を拒否する「メンタルブロック」があって彼の足を教室に向かせないのです。彼は最初の5回の授業を4回欠席していましたが、同じ部活の子がいたので何とか教室に入ったら「明るくて、楽しくて、かたくるしくない」風が吹いているのを感じたのです。彼はその後は一回欠席しただけで、仲間とともにリズムよみグループテストに合格し、その他の課題(群読プレゼンや並べ替えテスト)にも取り組んでギリギリでしたが合格しました。

このような雰囲気が生まれてくることは別のクラスの学生の声からも分かります。この作文を読むと「リズムよみテスト」が友達作りにまで貢献していることが分かります。

今年の前期は充実していたと思います。最初は仲間とコミュニケーションが取れなくて、英会話どころではありませんでした。ですが、私を受け入れてくれる仲間が出来て自分でも参加することができました。これは私にとって大きな一歩で先生のおかげでもあります。(N君)

最初の授業とかは、まだ友達も少なく英語を読むのがはずかしかったけれど、この授業はグループでの読みなので自分の分からないところをグループの人に聞けたり、教えてもらったり、それでも分からないところは先生がいてねいに教えてもらったので、読みも少し上手になりました。また、このグループがきっかけでたくさんのいい友達ができました。

大学に入学すると選択する授業は必修科目を除いてはそれぞれに異なりまします。また必修科目であっても大教室のレクチャーであることが多いので、所属するゼミや部活動の学生以外と知り合いになることはほとんどありません。そのような状況の中で、この「リズム読みテスト」は、級友と「コミュニケーション」を取ったり、「たくさんのいい友達」を作ることにも役だっているのです。この2人の他にも「このグループワークはぜひ続けたい」と書いている学生が何人もいました。

#### 5.4. 「リズムよみ」が要求するグループ学習

この「リズムよみ・グループテスト」がどうしてこのような変化を教室にもたらすのかというと、このテストはグループ員がお互いに協力することを要求しているからです。合格しようとするれば相互援助が自然な形で生まれてきます。しかもこのタスクには、出来そうなのだが実際にやってみるとすぐには出来ない、でも仲間と一緒にやっているうちに出来るようになるという不思議な性質を持っています。

この「やりがいのある難しさ」に学生たちはやる気をかき立てられます。この飛べそうで飛べない、飛べなさそうで飛べるハードルを仲間が心をひとつにして乗り越えていくことは何と楽しいことか！ 学生たちの表情を見ていますと分かります。「合格！」をもらったときの歓喜の声、「もう一度！」と言われたときの悔しそうな表情のどちらにも彼／彼女のイキイキとした学びの姿があります。(実をいうと教師である私も楽しくなってきたこのときだけは悩まされている肩こりをしばし忘れるぐらいです。)

しかもこの楽しいタスクを通して学生たちは英音法の一番の根幹である「強弱のリズム」を体得していくわけですから、これこそ「易行道」の手本とも言える英語学習です。

話は少し変わりますが、私は以前にグループを作って英文を和訳する課題に取り組みせたことがあります。共同学習を和訳タスクに取り入れていたわけですが、和訳する能力やスピードがそれぞれ異なるのでどうしても教える側と教えられる側が固定してきます。理解力の遅い学生は自分のペースでじっくり考えられないので最後は自分の頭で考えることを止めてしまいます。ほとんどのグループでそのような状況が生まれますので教室の雰囲気はだんだん重苦しくなってきます。私にはそんなふうには感じられませんでしたので、そのグループ活動を長くは続けることが出来ませんでした。

このことを振り返ってみると、そもそもこの和訳というタスクがグループ学習を必要としていたのかという疑問を感じます。これまでの、とくにリーディングマラソンを走る学生たちの様子を思い返してみると、自分のペースで和訳作業を進めていくの最も自然で効果的な習得のありようではないか、そして援助の手はその学生がそれを欲しているときにこそ教師や級友から与えられるのが好ましいのではないだろうかと思えます。

寺島(1997c)は、自分が寺島(1989)で「班学習なんかやめてしまえ」と書いたのは、当時はいわゆる「民主的」と言われる教師の中で、盲目的に、「班学習」をさせることが「集

団主義的教育」であり「進歩的」であるという風潮があったからであると述べた後で、「一斉指導にするかグループ学習にするかは学習する課題によって異なる。つまり学習内容によってはグループ学習ではなく、一斉指導の方が適切なことがある」と主張しています。つまり、グループのために学習があるのではなく学習内容がグループを要請するという事です。この観点から見てみると、私がグループを導入した「英文和訳」を行っていたときに感じた教室の「重苦しさ」の理由が分かるような気がしました。

## 5.5. 「ムーアが見えた！」— 2011年度の私の授業

さてここからはこの「リズムよみ」を私の授業でどのように行っているのかを書くつもりでしたが、昨年度の授業実践の詳細は先ほど紹介した「英語教授法「寺島メソッド」同好会サイト」にある講演原稿の中にありますので、ここではその講演レジュメの一部のみを以下に掲載しておきます。関心を持たれた方はそのサイトをご覧ください。

### **2-2 音声を楽しむ授業の風景：「リズムよみ」が教室にもたらすもの**

2-2-1 綴られた挫折と絶望 — 「大嫌い」「大の苦手」から始まる授業

2-2-1-1 中学英語「文法の関所」 — つまづきは「be 動詞」「一般動詞」「進行形」(?)

2-2-1-2 学習者が気づかない関所 — 「日本語力」と「見えない学力」

2-2-1-2-1 日本語力の貧困 — 「少年が石を投げた」vs 「少年が投げた石」

2-2-1-2-2 生徒にも教師にも見えないもの — 「集中力」「持続力」& 「眼の力」

2-2-2 「大嫌い」には何から始めるべきか — 「メンタルブロック」の解除

2-2-3 英語が苦手な大学生の授業づくり — 基本的なのにレベルは高い! ?

2-2-4 「リズム読み」の風景

2-2-4-1 「リズム読み」の特長 — 「身体性」と「発展的困難性」

2-2-4-2 「リズム読み」がもたらすもの — 教室に吹き込む新しい風

2-2-4-3 「リズム読み」に追い込むしかけ — 「ひと」を管理する技術

2-2-5 満点が続出する「並べ替えテスト」ができるまで

2-2-5-1 「どうやって覚えてらいいですか？」 — 量が多すぎた最初のプラン

2-2-5-2 欠けていた語順認識 — 新たな「フレーズ訳」が必要になった理由

2-2-5-3 三つのコラボが生み出すもの — 「センマルセンとつぶやきながら・・・」

2-2-5-4 寺島流「セン・マル・セン」vs 國弘流「何が、どうする、何を」

2-2-5-5 大人気「スラッシュ・リーディング」 — どうしてそこで切れるんですか？

2-2-5-6 「すごいね、満点が18人もいた！」 — 選択肢は「枝葉」から「幹」へ

2-2-6 「リズム読み」「通し読み」から「群読」「スピーチ発表」へ

2-2-6-1 「通し読み」でリズム・パワー、UP! — No Break の「リズム読み」

2-2-6-2 やる気を引き出す「さじ加減」 — 「リズム読み」に必要なもうひとつの評価

2-2-6-3 「英語で英語の授業」に字幕スーパーを! — 群読プレゼンはフレーズ訳つき

2-2-6-4 「模倣」から生まれる「創造性」 — レポートには出てこなかった群読

2-2-7 スピーチ発表評価方法の新たな提案

2-2-7-1 「減点法」はなぜダメか? — 意欲を引き出す評価のありかた

2-2-7-2 「俺には投票するなよ」 — もう一度聞きたいスピーカーの選出



2-2-7-3 「ムーアが見えた！」 — 教師評価とぴったり一致した学生投票

2-2-8 授業にとって「楽しさ」とは何か？ — 「もっと早くに出会っていたら・・・」

## 6. おわりに — 書くことは考えること

私は本論の冒頭で、寺島隆吉氏の理論と実践の追試を行っている私の授業の様子を紹介しながら「題材選択と教材化」「リズムよみ」「評価のしくみ」の三つの問題について論ずると書きましたが、実際には第2節で「題材選択」を論じたあとは、第3節で「教材化」の一部である「予備知識を与えること」について述べることはできませんでした。

またその後の第4節では、自分の授業の様子を語る中で「評価のしくみ」について少し触れていますが、もう少し詳しく述べた方が読者の方には分かりやすかったと反省しています。また「リズムよみ」については最後の第5節で記述することになりました。

この第5節では本当は現在進行中の音声を中心にした前期授業のことをもっと語りたかったのですが、まだ完結していないことと、もっと大きな理由はもう書いている時間が少ないことから諦めざるを得ませんでした。別の機会にまとめたいと思っています。

また冒頭では出来る限り「教室の事実」を書き起こしたいとも書きましたが、これはなかなか時間のかかる骨の折れる作業でした。教師が自分の「教室の事実」を認識することがどれほど大変なことかを思い知らされた1ヶ月でした。しかしながら、書きながら忘れていたことを思い出したり、新たな考えが次々と浮かんできましたので、また同時に楽しい作業でもありました。人間というものは頭ではなく手で考える、つまりは思考というものは書きながら深まるものであることを実感しました。

最後に、本学会の40周年記念DVD-ROM『あゆみ』を作成されたスタッフの方にお礼を申し上げたいと思います。このDVD-ROMのおかげで私は学会に入会する前に出された紀要論文を数多く目にするのができ本論執筆に大いに役立てることができました。どうもありがとうございます。また、私の拙い原稿を最後まで読んでいただいた方にも感謝いたします。ご意見ご感想がありましたら、syouzi@alice.asahi-u.ac.jpまで送っていただけると幸甚です。(2013/06/28)

### <引用文献>

- 青木知代 (1987) 「教材の中の題材」『中部地区英語教育学会紀要』第16号 140-144頁
- 浅野典夫 (2009) 「ものがたり宗教史」東京・筑摩書房
- 浅野典夫 (2012) 「“なぜ?” がわかる世界史—前近代 & 近現代」東京・学研教育出版
- 岩井志ず子 (2006) 寺島隆吉監修『授業はホキメキ』岐阜・あすなろ社
- 榎垣実 (1961) 『日英比較語学研究』東京・大修館書店
- 江利川春雄 (1991) 「英語科教育における題材内容と時代背景」『中部地区英語教育学会紀要』第20号 285-290頁
- 江利川春雄 (1992) 「異文化理解教育の視点からみた英語教科書の題材」『中部地区英語教育学会紀要』第21号 97-102頁
- 江利川春雄 (2002) 「映画の日英版比較によるコミュニケーション方略の指導」『中部地区英語教育学会紀要』第31号 165-170頁

- 太田朗 (1965) 「日英語の音体系の比較」『日英語の比較』(『現代英語教育講座』第7巻 : 1-40頁  
東京・研究社出版
- 中山兼芳 (1980) 「子どもにとってよい教材とは」『中部地区英語教育学会紀要』第9号 83-89頁
- 中山兼芳 (1990) 「学習意欲を高める教材とその条件」『中部地区英語教育学会紀要』第19号  
82- 87頁
- 野澤裕子 (2002) 寺島隆吉監修 『授業はドラマだ』東京:三友社出版
- 寺島隆吉 (1987) 『英語にとって「授業」とは何か』東京:三友社出版
- 寺島隆吉 (1996a) 『ロックで学ぶ英語のリズム』岐阜:あすなろ社
- 寺島隆吉 (1996b) 『キングで広がる英語の世界』岐阜:あすなろ社
- 寺島隆吉 (1996c) 『チャップリン「独裁者」の英音法』岐阜:あすなろ社
- 寺島隆吉 (1997a) 『チャップリン「表現よみ」への挑戦』岐阜:あすなろ社
- 寺島隆吉 (1997b) 『ロックで広がる英語の世界』岐阜:あすなろ社
- 寺島隆吉 (1997c) 『キングで学ぶ英語のリズム』岐阜:あすなろ社
- 寺島隆吉 (2000) 『国際理解の歩き方』岐阜:あすなろ社
- 寺島隆吉 (2002) 『英語にとって「教師」とは何か』岐阜:あすなろ社
- 寺島隆吉 (2007) 『英語教育原論』東京:明石書店
- 寺島隆吉 (2009) 『英語教育が亡びるとき』東京:明石書店
- 寺島隆吉・寺島美紀子 (2001) 『魔法の英語』岐阜:あすなろ社
- 寺島隆吉・寺島美紀子 (2004) 『センとマルとセンで英語が好き! に変わる本』東京・中経出版
- 寺島美紀子 (1987) 『英語学力への挑戦』東京:三友社出版
- 寺島美紀子 (1987) 『英語授業への挑戦』東京:三友社出版
- 寺島美紀子 (2009) 「Dramatic Readingの授業構築—AV教室・無線LANを利用した大学における英語授業実例」『情報学研究』(朝日大学情報教育研究センター年報) 第18巻 1-37頁
- 東後勝明 (1977) 『英会話の音法 50 —英会話の3要素:音・リズム・イントネーション』  
東京・ジャパンタイムズ
- 徳田政信 (1980) 「英語教育は会話と通訳が目的か—安価なプラグマチズムを排す—」『中部地区  
英語教育学会紀要』第19号 181-183頁
- 藤井健三 (1986) 『現代英語発音の基礎』東京・研究社出版
- 三浦孝 (1996) 「実践研究における事実」『現代英語教育』11月号 8-11頁
- 山田昇司 (2005) 寺島隆吉監修 『授業は発見だ』岐阜・あすなろ社
- 山田昇司 (2013) 「英語“強勢リズム”習得のための実践的研究」『朝日大学一般教育紀要』  
第38号 1-21頁
- Allen, W. Stannard. 1954, 1965 (New ed.) *Living English Speech : stress and intonation practice for  
the foreign students.* London : Longman
- Nation, I. S. P. (2001) *Learning Vocabulary in Another Language.* Cambridge : Cambridge  
University Press.